

# 人生の学校、離島で作る

トヨタ自動車を退職して、島根県の離島でベンチャーを立ち上げた。  
企業人向けに研修を開催。島に残された日本古来の生活が学びの対象。  
自ら仕事を見つけ、学び、それを教材にする。新たな教育手法を切り開く。

阿部 裕志  
abe  
ひろし

巡の環社長



写真：伊達 悅二

6月上旬、日本海に浮かぶ島根県の隠岐諸島の1つ、中ノ島には夏日が降り注ぐ。切り立った赤色の崖がある島の景勝地、明屋海岸には青く澄み切った海が広がる。

平日にもかかわらず20~30代の男女7人が海辺で火をおこし、自作した竹筒でご飯を炊いている。CDプレーヤーからは軽快な音楽が流れ、それぞれが楽しそうに作業をしている。周囲には彼ら以外、誰もいない。

その1人、阿部裕志（34歳）は波打ち際の岩にかがみ込み、落ち枝で自作した釣り竿を垂らしていた。

「結構、いろいろな魚が釣れるんですよ」と話しながら、慣れた様子で岩の縁を覗き込む。

一見すると週末にキャンプを楽しみに来た都会の若手会社員のようだ。だが、彼らはこの中ノ島で起業したベンチャー「巡回の環」の社員たち。このアウトドア体験も実は業務の一環。島で開催する社会人向け研修の予行だ。

阿部が2人の仲間とともに巡回の環を立ち上げたのは2008年。目指したのは田舎で雇用を生み出すための「島の学校」だ。持続的に雇用を生み出すには地域に根差した事業の創設が欠かせない。そのためには地域の魅力を知る必要がある。担い手は都市部など地域外から来る事も多い。「のんびり田舎暮らし」ではない地場に根差した生き方が求められる。そうした人生の学びの場を提供するのが狙いだ。

起業から6年、巡回の環の社員は7人にまで増えた。売上高はおよそ4500万円とまだ小規模だが、黒字決算を続け目的の教育事業も軌道に乗りつつある。

舞台は隠岐諸島・中ノ島に位置する島根県海士町。本州の沖合約60kmに浮かぶ面積33km<sup>2</sup>、周囲89kmの離島の町で人口はおよそ2400人。産業は漁業、農業を中心だ。美しい海に囲まれた自然豊かな島だが、生活環境は厳しい。本州からはフェリーで片道3時間、日に数便あるのみ。かつて7000人が暮らしていたが、多くの若者が働き口を求め島を出ていった。その結果、少子高齢化が急速に進んだ。65歳以上の高齢者が4割以上を占め、全国平均の24.1%を大きく上回る。町の税収も減った。

過疎化と財政破綻の危機に直面する離島。この状況を大きく変えたのは2002年、海士町の町長に就任した山内道雄だった。自らの給与は50%に削減、町役場の職員の給与は最大30%カットした。職員の人数も減らし、財政支出を減らすための様々な改革を断行する。その節約分を産業育成への投資に回した。

「まずは守りの戦略で財政を健全化し、攻めの戦略で産業を興して島外から“外貨”と人を呼び込む」

山内は海士町の改革をこう説明する。その努力が実り町の財政は単年度で黒字化に成功。島外の人を呼び込むため交流事業を活発化させ、2004年からの9年間で、島外から海士町に移住（Iターン）したのは361人、帰郷者（Uターン）は204人に上る。20~30代の若者が多く、こうした移住者が海士町全体の2割を占めるほどだ。

この離島に阿部も魅せられた。だが「海士町で起業して社長になるとは夢にも思わなかった」と打ち明ける。

## 民間ロケットの開発を夢見る

阿部は愛媛県新居浜市で幼児期を過ごした。父方の祖父は林業、母方の祖父は船乗り。自然豊かな環境で阿部はのびのびと育った。一方、父親は工場の生産設備などを開発するエンジニアで転勤が多かった。ほどなく愛知県に移り住んで、地元の進学校に通う。数学や物理が得意でロケット開発を夢見る。1998年、1浪して京都大学工学部入学。材料工学を専攻し、大学院にも進み、ロケットの素材としても使われるチタン合金を研究した。

ロケット開発を目指したのは自らが宇宙に行きたいと考えたからだ。「いずれ誰もが宇宙を旅行する時代になる。必要なのは民間ロケットだ」。阿部はそう確信していた。

就職先に選んだのはトヨタ自動車だった。トヨタではロケットは開発していない。だが、民間ロケットを生み出す潜在力があると信じた。2004年、トヨタに入社すると生産技術部門に配属になり、レクサスなど新車種の製造ラインの立ち上げに携わった。入社早々、新規プロジェクトに加わり阿部は意気を感じていた。

一方、週末にはアウトドアを楽しんだ。ラフティングの最中、鉄砲水に遭ったこともある。そうした危険な思いをしながらもアウトドアに取りつかれていく。宇宙に行きたいと夢見たのもそうした冒險願望の1つと言えるかもしれない。

阿部が幼少の頃からこだわっていたライフスタイルが「自給自足」だった。

「どんな環境でも生き抜いていける力をつけてほしい」

その思いはやがて、週末のアウトドアにとどまらず仕事を含めた自身の生き方にも及んでいく。

大企業で安定した職を得ている。トヨタを辞め海士町

## 旗手たちのアリア

で起業する時も当然、「なぜ、そんな優良企業を辞めるのか。もったいない」と周囲に指摘された。だが、「大企業や都会といった大きな集合体に身を置き、普段はそのシステムに従って動く。週末、自然の中にいる時だけ人間らしさ、本来の自分らしさを發揮する」。そんな、生き方に疑問を抱くようになっていた。

### 仕事は起業してから考える

そんな阿部が海士町を最初に訪れたのは2006年12月のこと。同僚から「自立、挑戦、交流」を掲げる海士町の存在を知った。島に移住して教育事業に携わっている岩本悠を紹介され訪ねてみたのだ。

岩本はソニーを退職して2006年に島に移住。町が進める高校魅力化プロジェクトに加わっていた。海士町にある島根県立隱岐島前高校は近隣地域唯一の高校だ。だが、近年の少子化で2008年には生徒数が28人まで落ち込んだ。廃校の危機を回避しようと町と県、高校が協力して高校の魅力化に取り組んだ。生徒が少ないことを逆手に取った少人数指導や島の自然を生かした独自の授業、そして県外からの就学を認める「島

留学」を実施した。さらには町営の学習塾を作り、大学進学率を上げるなど対策を打った。その結果、2012年の入学者は県外からの21人を含め59人まで増えた。

海士町に行った阿部は、そうした島の問題を熱く議論する町役場の職員たちに会った。夜には役場の職員や島に移り住んだ若者、地元の中学生たちを交えて食事をした。そこで年齢や肩書など関係なく、島の発展について自由闊達に語っている光景を目の当たりにした。

いつしか阿部は「都会に住み、大企業でサラリーマンをしていては決して経験できない。この輪に僕も交ぜてもらいたい」と真剣に考えるようになった。

その後、阿部は3回、海士町を訪ねている。島への移住に心は動かされるものの今の職を辞して、全く違う環境で暮らしていくのか。決心がつかなかったからだ。

転機が訪れたのは2007年、岩本から紹介された信岡良亮、高野清華との出会いからだった。

信岡は東京のネットベンチャーに勤務して主にウェブ制作を手がけていた。高野はNPO(非営利組織)などで地域の話題を取材して発信する市民メディア活動をしていた。2人はその時、既に海士町への移住を決めていた。

3人は京都で会い、すぐに打ち解けた。その晩、信岡は「一緒に起業しないか」と阿部を誘った。

だが阿部は、海士町の町役場の研修生としてまずは働くつもりだった。離島での生活を体験しながら、時間をかけて人間関係を築き、そのうえで自分にどのような仕事ができるかじっくり考える計画だったのだ。

かなり悩んだが、最後は2人の熱意に押され起業に加わることを決めた。

トヨタを退職して海士町に移り住んだのは2008年1月。起業したものの「仕事はこれから考える」状態。間もなく3人の歩調は乱れてきた。特に「羽を伸ばして、1年くらいかけて島になじんでいきたい」と考えていた阿部と「稼ぎがなくては会社は破綻する」と危機意識の強かった信岡とは意見が食い違った。

信岡は東京など島外からウェブ制作を受注して、創業当初の巡の輪を支えていた。高野は町役場からの依頼を受け、高齢者を取材して記録に残す事業に没頭していた。

阿部にはそうした専門性がない。焦りがないわけではなかった。だが、「ガツガツ仕事を探すよりは、島の生活を学ぶことを重視した」(阿部)。

ここでトヨタ時代の経験が生きた。新人で配属された製造ラインの設計で現地現物の考え方に対する接觸からだ。ラインで働くのは熟練工たち。どんなに阿部のアイデアが優れても、現場を知らない新人の意見をすぐには受け入れてはくれない。そんな様子を見た当時の上司は「正しいと思うなら現場に行って説得してきなさい」と指示した。現場から戻って「私の意見など聞いてはもらえませんでした」と報告する阿部に「それならもう一度

度、行ってきなさい」と諭した。

### トヨタで培った現地現物

何度も現場に通ううち、どうしたら説得できるかを考えようになった。話をよく聞き、実際の作業を理解するよう努力した。そのうえで自ら見本を示した。相手の懐に入るため積極的に一緒に食事をし飲んだ。作業員たちは次第に阿部の提案を受け入れるようになった。

海士町に来てからも同様だ。阿部は漁業権を取得し、船を買って自ら時々、漁をしている。稻作や畑作も手がけている。島の生産者を理解するためだ。人づき合いが深い地方では、夜遅くまで飲むことが多いができるだけ参加している。島の人々は阿部について「気さくで謙虚、好奇心旺盛で島について熱心に聞いてくる」と話す。

信岡が手がけた島の物産の通販サイト「海士Webパート」も島の生産者との関係作りに一役買った。当初、町役場からウェブ制作だけを受注したつもりが、商品の販売まで任される。阿部は「教育事業とは関連がない」と猛反対したが、結果的には島の物産への理解を深め、それを島外の人にどう伝えればよいかを体得した。

ある時阿部は、京都の人気日本料理店「草食なかひがし」を営む中東久雄に海士町の名産である岩ガキのサンプルを送った。中東とは大学時代に偶然知り合った。店の食材として使えないか試食してもらおうと考えたのだ。中東はその味に満足して、阿部が販売する価格よりも高く買うことを伝えた。「いい食材だからそれなりの金額をお支払いしたかった。もちろん島で頑張っている阿部君を応援したい気持ちもあったけれどね」(中東)。

こうした阿部の人柄を見込んで、徐々に島のイベントの企画や運営を依頼されるようになる。阿部たちが手がけたイベントはどれも盛況だった。

阿部は「地域振興には都会と田舎、両方のセンスが必要だ」と考える。そうした人材は島内にはなかなかいない。そこに巡の環が活動する場を見いだしたのだ。

教育事業に本格的に着手したのは北村三郎と出会ってからだった。北村はいすゞ自動車に35年間勤め、風土改革を進めた立役者だ。定年退職してからは企業人の人間力を高める研修、五感塾を提唱している。

北村は五感塾について「人間力のある人に接して、人間力のありようを五感で感じる。現地、現物を通じて学び方を体得するのが目標だ」と説明する。その五感塾の

阿部 裕志(あべひろし)

1978年	愛媛県新居浜市に生まれる
2004年	京都大学大学院工学研究科修了、トヨタ自動車入社
2008年	トヨタを退社、島根県海士町へ移住 巡の環を3人で起業 第1回海士五感塾を開催 通販サイト「海士Webパート」設立
2009年	巡の環社長に就任
2011年	海士町教育委員に就任
2013年	第1回めぐりカレッジを開催

開催地の1つとして北村が着目したのが海士町だ。「離島には日本古来の生活が残り、独特の文化がある。企業人が普段は体験できないことがたくさんある」(北村)。

2008年11月、イオングループの労働組合が主催した初めての海士五感塾を、巡の環が企画運営した。その後、サントリーの労働組合の研修や島根県内の企業の研修などで五感塾を開催。さらに企業向けだけではなく一般参加できる五感塾も始めた。海士町での開催は12回を数える。内容は農業・漁業生産者、移住者など島の人々との交流や自然体験など多岐にわたる。五感塾に参加したイオン労組の中川恭宏は「島では当たり前で誰も注目しないような事柄を見いだして、魅力的なプログラムを組み立てている阿部さんのセンスには驚いた」と話す。

現地で農業を営む向山剛之は講師として五感塾に参加する。「離島での農業は本当に厳しい。島外から憧れて海士町に来る人もいるが、五感塾では本当のことを話しているよ」と語る。また、別の講師、郷土料理を研究する波多美知子は「私の料理は昔から誰もが作っているもの。特別なことは一切ないけれど、五感塾に参加した人と一緒に作って食べるには私にとっても楽しい」と語る。

人前に出る経験がない島の人たちに講師役をお願いするのは簡単なことではない。だからこそ、阿部は地域の人々との普段からのつき合いを大切にする。

今年からは地域振興の担い手である地域コーディネーターを育成する「めぐりカレッジ」を開始した。中級コースは海士町での研修を含む半年間の通信教育だ。

阿部たちは島で起業し、学びながら稼いできた。その貴重な体験を教育プログラムに組み込んでいる。

阿部たちの挑戦は始まったばかり。だが、地域振興の担い手を育てていけば、やがては各地に波及して日本全体をいい方向に変えていく大きな力にもなり得る。町長の山内は言う。「変革に一番必要なのは『本気度』だ。阿部君たちには高い本気度がある」。=教説略(宇賀神 翔司)■



巡の環が企画運営する海士五感塾。島の人々との体験学習が特徴